



大納言

世に宇治大納言物故といふ地ありて大納言  
ハ隆國といふ人あり西宮殿西の宮殿の孫俊賢  
大納言乃事二の男あり年あつたなりて  
いあつたといひていとゆをりてみ月もい  
丹まがてい事等院一切経書乃南の山ま  
二南泉房といふ所ありてわかれをり  
さて宇治大納言といふ事ありてむらさ  
ゆにいけておつけある姿ありてむらさ



ことごとく一紙してせむにむかひてありては、大なる  
 ちり紙としてあつせむにせむにして、往來<sup>おも</sup>れ者<sup>あ</sup>  
 なるも、るるを、一紙にむかひてありては、  
 物類も、せむにむかひてありては、  
 かつらむ、むかひてありては、  
 是の今の、天らしく、其事も、あると、大<sup>たい</sup>唐<sup>たう</sup>乃<sup>の</sup>も、  
 あり、日本<sup>にほん</sup>は、其事も、ありては、  
 と、此<sup>こゝ</sup>も、ありては、其事も、ありては、

かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、  
 かつらむ、其事も、ありては、

よ又物<sup>もの</sup>ころりあつていふ事あるにせしむるに大  
 納<sup>おの</sup>これ物<sup>もの</sup>終<sup>つ</sup>りしむるはむらりのあつたに  
 う乃<sup>の</sup>はれ事<sup>こと</sup>あどかといふ事あるに  
 し。若<sup>し</sup>を宇治拾遺<sup>うぢしゆい</sup>乃<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>終<sup>つ</sup>りしむるに  
 のこといふ事あるにせしむるに又<sup>また</sup>後<sup>ご</sup>に  
 拾遺<sup>しゆい</sup>といふ事宇治拾遺<sup>うぢしゆい</sup>物<sup>もの</sup>終<sup>つ</sup>りしむるに  
 や若<sup>し</sup>別<sup>べつ</sup>志<sup>し</sup>ありあつていふ事あるに

宇治拾遺物語惣目録

卷第一

序

道<sup>ち</sup>命<sup>のみこと</sup>阿<sup>あ</sup>闍<sup>あつ</sup>梨<sup>り</sup>於<sup>お</sup>和<sup>わ</sup>泉<sup>いづみ</sup>式<sup>しき</sup>部<sup>ぶ</sup>之<sup>の</sup>并<sup>なら</sup>讀<sup>よ</sup>經<sup>きやう</sup>五<sup>ご</sup>茶<sup>ちや</sup>  
 乃<sup>の</sup>祖<sup>そ</sup>神<sup>かみ</sup>聽<sup>き</sup>用<sup>もち</sup>事<sup>こと</sup>  
 丹<sup>に</sup>波<sup>は</sup>國<sup>くに</sup>篠<sup>しの</sup>村<sup>むら</sup>平<sup>へい</sup>草<sup>くさ</sup>生<sup>な</sup>事<sup>こと</sup>  
 鬼<sup>おに</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>事<sup>こと</sup>  
 伴<sup>ばん</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>ごん</sup>事<sup>こと</sup>



清徳聖王せいとくせいおうとくく乃事とくく乃事

静観僧正せいくわんそうじょう行ぎょう乃事乃事

同僧正どうそうじょう大嶽だいとく乃事乃事

金峯山きんぷせん落蒲打事らくふうちごと

用純もちよああ乃事乃事

原行死人はらゆきしにんををああ乃事乃事

鼻長僧事はなながそうじ

晴的封蔵人はるだいのふうざうにんが将事がしょうじ

季通すえ欲よく逢あ殃あやふし事こと

糝あき合保昌事あひあき

明衡あきひら欲よく逢あ殃あやふし事こと

唐辛からし於波お安あ乃事乃事

ちちりりひひ強こころ力ちかられれ乃事乃事

柿木かきのき乃事乃事

卷第三

大太師おおたしぬぬ乃事乃事

菟大納言忠家物言女放尾事

小式部内侍定頼卿乃經よめてたる事

伏見をいのかへと事

名僧正と國後戲事

繪佛師良秀家の巻く心をみて悦事

虎乃とんそりこめる事

樵支うさ乃事

伯母事

同人佛事乃事

菟六事

多田新發意郎亦事

因懐至別當地為作恙事

伏見源理大吏俊總事

長門女司女葬送時被本処事

雀報恩事

小野曾廣才事

平貞文本院侍従事

一条攝政歌事

狐家又火法くろ事

卷第四

きつぬ人よ法を志と食事

佐波必にみ金事

薬師寺別当事

妹背崎事

石が乃下れくらあとの事

東小院菩薩講座事

三河入石道世の事

進命婦清水詣事

業遠船長禊生事

葛昌忠恒未事

及朱雀院大六佛奉作給事

式部大捕實重が義正躰拜見事



智海法師ちうかいぼうし下しも頼人たのしみ法談ぼうだん事こと

白河院しろがわいん御ご寢ねのまきぎ物ものよよおおそそれれをを行い事こと

永超僧えいしゆうそう都と真ま食じき事こと

延房えんぼう實じつ因いん自より湖こ水すい中ちゆう法ぼう文ぶんのこと

慈惠僧じゑそう正せい戒かい増ぞうくくつつ進しんたたるる事こと

卷第五

白河院しろがわいん地ぢ蔵ざう事こと

伏見ふし見後ご理り大だい史しのこと三さん教きやう上人じゆうじん九く行ぎやうむむ事こと

以長物いぢやうぶつ忌いのこと事こと

範久はんきゆう阿あ周しゆう梨り西せい方ほうととううろろよよせせざるる事こと

陪はい後ご家け總そう兄けい才さいををかかひひ欺きめめ事こと

陪はい後ご清せい仲ちゆう事こと

かかみみ曆れきああつつららへへたたるる事こと

實じつ子しににああららるる人ひと實じつ子しににああららるる事こと

清せい室しつ戸こ僧そう正せい事こと

并な一いつ系けい寺じ僧そう正せい事こと

或僧人の許して沙門ぬきみかしの事  
仲胤僧於地自権現説法の事  
大ニ条殿よ小式部内侍を歌讀の事  
山横川を能地系事

卷第六

廣貴依妻前大魔王交へる事  
世その寺よ死人をわらひてす事  
留志長者事

清水寺に二千夜衆詣者打入双六事  
観音經化地人をくめつけ給事  
契殿の社より所幣紙米未行事  
志ふれぬみはくはの湯よ観音沐浴事  
帽子児と孔子同答事  
僧伽多行羅刹事

卷第七

五色麻乃事

播磨守為家侍佐多事

三條中納言水飯事

檢排違使忠の事

長谷寺系藤男利生よりあつる事

小野文大郷食事付西宮教富小路大長

ホ大郷食事

式成源滿則負ホ三人被滝口弓藝事

卷第八

大膳大夫以虫お取同事

下智武正大風毎日泰法性寺殿事

信濃丞死事

敏行朝長事

東大寺花嚴會九事

獵師佛を射事

千手院僧正仙人よあ事

卷第九

滝口道則習術事

寶志和尚託乃事

越前敷賀女親を助け事

くろくまけがなを供養事

はねまごづ郎お佛くらふ事

秋よんく被免罪事

大安寺別当女よ嫁よあ男着見事

博奕打算入の事

卷第十

伴大納言應天門城争く事

放鷹樂的選よ是季りる物事

堀川院的選よ笛ふりせ行事

浄苑八坂坊よ強盗入事

ちくし後のちささゆり事

吾孀人止生賀事

豊あむ事

花人死事

小槻當平事

海賊殺心出家事

卷第十一

あとしね事

保挿盗人事

晴的と公見子僧の事 晴的殺蛙事

河内守頼信平忠恒とせむ事

白川法皇水面受領の下り事

秀人得業猿澤池竜事

清水と御帳給子女事

則光盗人をさす事

空入水一僧事

目録上人吉野山へ逃鬼事

丹後守保昌下向乃時被経又逃事

出家功德事

卷第十二

達磨見天竺僧行事

提婆菩薩奈鉢樹がさの汗事

慈惠僧正采了受戒之日事

内記上人破法師陰陽師紙冠事

持經者般實効驗事

室也上人臂觀音院僧正初直事

增賀上人奈三条宮振舞事

聖寶僧正汲一条大路事

穀新聖不實露頭事

季直少将款乃事

樵夫小童隱題奇讀事

忠信奇讀事

法々ゆき奇事

あづま人三の乃事

河原院又融云靈位事

八歳童孔子と向答むかひこたへ事

鄭太尉事

貧俗親佛性あつちきさく富事

宗行しゆゆき郎らう射虎しやこ事

遣唐使けんたうし子被食虎こひくこ事

或上達部中將あつえんたうべ之の時逢あふり百八ひやくはち事

陽成院やうせいゑんを物ものの事

水みづを漱すす教しやくじじささびび乃の事

一条棧いちじょうせんお屋鬼おやまに乃事

卷第十三

上緒主得かぎとのぬし金かね事

元捕落もととりるの事

俊宣しゆんげん迷神まよひかみよあ事

亀かめをを買かひててそれそれ事

着買人ゆめを乃事

大升おほのぼろ光ひかり遠妹とほむすめ強つよ力ちから事

大升おほのぼろ光ひかり遠妹とほむすめ強つよ力ちから事

大升おほのぼろ光ひかり遠妹とほむすめ強つよ力ちから事

或唐人女乃ひつてにじまれるは志す  
してある事

出雲寺別当に鱈たらをもちたるをありあ

わらるして食ま事

念佛僧まじり魔ま性じやう生せい事

慈覚大師入り顯けん顯けん城じやう治ち事

法ほ天てん僧そう入り穴あな事

宗照上人そうじやう死し録りく事

淺せん淵えん川がわ聖せい乃の事  
優婆塞うぱさい婦ふ多た才さい子し乃の事

卷第十四

海かい雲うん比丘びく才さい子し童どう乃の事

寛くわん朝てう僧そう正せい乃の事

經きやう於おくらあえにあり事

魚ま養やう乃の事

新しん羅ら國こく后ご金きん榻た乃の事



珠のあそひ先量の事

小面女雜使六事

仲流僧於連歌事

大将慎事

佛堂用白は犬晴的等きごとけ事

る階俊平が身入る筈事

卷第十五

法見原天皇と大友皇子合戦乃事

頼時の胡人見を事

賀茂祭乃より武正兼行の事

門部府生海賊射返す事

五佐判官代通信人遠去て園白殺り

在合事

極樂寺僧施仁玉經誌事

伴良縁野世恒町沙門依下文の事

相應和尚上都卒夫事 付深教石奉

一

二

新事

仁戒上人往生乃事

秦始皇自天竺來僧禁獄事

後乃千金の事

盜跖と孔子向答乃事

宇治拾遺物語卷第一目録

一 道命阿闍梨於和泉式部之許讀經五条乃祖神聽鳳事

二 丹波小篠村平草生事

三 鬼にふぶさらあ事

四 伴大納言事

五 随求陀羅尼菴額法師事

六 中納言師時法師乃玉笠檢知事

七 新門聖鹿に欲替事

八 易乃うらひの志と金取出事

九 宇治教倒しをせしめて實相房僧正誦者に

先さゆ事

十 秦兼久向通後郷紳悪口事

十一 源大納言雅後一生不犯金うせ事

十二 児乃久餅山家よ空寝一き事

十三 田舎れらと様乃ちあそんで事

十四 小菰を野にわけて事

十五 大童子鮭ぬき事

十六 尼地系見事

十七 修行者逢百鬼夜行事

十八 利仁暑預粥事

今もむらう道令阿闍梨として傳教乃子より  
 もきりまゝの僧ありきると和泉式部に於ていふに  
 をめてまゝくふみきりまゝの僧といふはむらう  
 卿のゆりけふよ目とゆふにゆふとゆふとゆふと  
 見あるゆふとに八書とゆふとゆふとゆふとゆふと  
 んとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
 せうとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
 ゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
 ゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
 乃生世にゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
 経をゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと

101

101





ありきりたつらうおちぬ毎風ういひて海よき  
 まて出乃中に女よきあはたはゆりぬ又本ありとこれ  
 りときりかろ海一とよきとよき一木乃ら海にれ  
 けるよき入る目もあはたはゆりてかゝる海に  
 まあつらう人の喜あはててあつらひたつらう  
 いたも出乃中に女よきあはたはゆりぬ又本ありとこれ  
 をあはたはゆりてあつらひたつらう  
 海ういひ海くかゝる物どもあつらひたつらう  
 ら海よきとよきあはたはゆりてあつらひたつらう  
 目一ありとよきあはたはゆりてあつらひたつらう  
 よあはたはゆりてあつらひたつらう

てん乃れれいひてあつらひたつらう  
 よあまのそらあはたはゆりてあつらひたつらう  
 この鬼ういひ海よきあはたはゆりてあつらひたつらう  
 あつらひたつらう  
 一あつらひたつらう  
 まあつらひたつらう  
 乃鬼あつらひたつらう  
 此鬼一人立ちあつらひたつらう  
 きくぞいひたつらう  
 了ぞくくぞいひたつらう  
 まらつてあつらひたつらう





流るるまづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり  
かゝるにまづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり  
鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
らんねやいともいふに座乃鬼のうらみあり  
座乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
とれぬといふに座乃鬼のうらみあり  
か乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
此ものうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
か乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
ゆゑに流るるまづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり  
まづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり

折一と申す物ありきとて座乃鬼のうらみあり  
かゝるにまづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり  
座乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
らんねやいともいふに座乃鬼のうらみあり  
座乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
とれぬといふに座乃鬼のうらみあり  
か乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
此ものうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
か乃鬼のうらみともいふに座乃鬼のうらみあり  
ゆゑに流るるまづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり  
まづりゆえんともいふに座乃鬼のうらみあり

は清く行へて乃ちあきらむるといふ事なれどもあきらむる事ありて鬼  
一乃ちあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
此等と云ふる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
そんとして此れは決<sup>だ</sup>中<sup>ちゆう</sup>をこぼりよきいふれども一乃ち  
こ乃ちあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
まらちあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
ふりかたありて酒のこあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
はさうしてあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
思ひあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
こ乃ちあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
こ乃ちあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼

かくあきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼  
あきらむる事ありて鬼一乃ちあきらむる事ありて鬼



④

あまこもゆのみしむう。侍大将の納言は吾男の佐渡守に  
 司の後者より彼國より吾男を後にして海を渡り西大なる  
 と東大なると戦まじをきてきちなるなりと人々を妻に女  
 よころよりとわして海を渡りてきちなるなりと人々を妻に女  
 りんぶらんとあえすふに吾男は海を渡りてよ  
 りもよのりて海を渡りてきちなるなりと人々を妻に女  
 乃郡司のあへはむいふありと郡司も吾男を知る相人也  
 をいふ日來いさをもせぬよとわれに郷長をきてよとふ  
 ともよのりて海を渡りてきちなるなりと人々を妻に女  
 ともあへて海を渡りてきちなるなりと人々を妻に女  
 なるにまじりて海を渡りてきちなるなりと人々を妻に女

宇治



が家乃おひんぐにあらつてもどりの書城をせまくはつし  
 ちしくどいほごにち年乃友つり希きうあふよ勇乃  
 いも一りあひつりしれどもあ物もあしあふにを  
 ち西へち一系冠者乃家乃中人ほごよて遊侍めし  
 てさいはへして額をうちしりし遊侍よりし我つ。冠者  
 もえんことつあわさ海とんどもききてなまあが  
 かや城をれいよあもこもあする家色もせはせ  
 しまろ一きする屋うのそり此次はあかんるまうつ  
 ちうつらるるを純よあ清きまする人ども一友にを  
 けしつらあまをれよはをてつよな  
 中納言師師とあ人あつてあつて

此色にあらつはつに色もあまきまを先乃秋れみど  
 よ不動如秋安とつちまきうけく本練よれ念珠乃大なる  
 ちるしとげまよあ聖法行入きてまきう。中納言あれ  
 ちるしとる僧もまきう秘あれたあしあにあをを  
 ちたあてかりれをいえるあふを志乃びつてをて  
 ちるしとる生死の流轉もるをんするあ煩悩にひ  
 つりてつりつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
 ち益ちりと思つてつりてつりてつりてつりてつりて  
 ちるしとる生死乃まうれ清つてつりてつりてつりて  
 ちるしとる中納言まて煩悩のまを清つてつりてつりて  
 ちるしとるあつてつりてつりてつりてつりてつりて

城のきあきてしる事いふまはせにせんとあつて  
引巻をうりあつて其書をすきき乃て其書を引巻とせん  
志もにさがるしる事いふまはせにせんとあつて人  
あつてしる事いふまはせにせんとあつて中納言の法  
所もさしれとせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
中納言の法をうりあつて其書をすきき乃て其書を  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん

あびせたりし事いふまはせにせんとあつて  
引巻をうりあつて其書をすきき乃て其書を  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん  
引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん

引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん引巻とせん







あつとてび女被らばきれだおきにせり様人さふる  
 といふ乃款おかしいも一易やすれなといふ志とやさうまうとふ  
 いさく屋納きんろ乃一竹小屋らむる事い志結むすむ  
 いむさるいゆるといひくきてもあはすりて千と金  
 をいさまうれもきまをよまはいぶととふいどのれ  
 のお屋乃うせゆ一ゆりに世中にあふべきなむの物風  
 ぬくさせをきりし屋らまひん十年ありて  
 ろ乃月におくに接人来て屋らむるをほろ乃人  
 合あ合あ子こをぬをいぬる人ありちれよろの合あ合あ  
 くくぬぐさかかんかりえうりて志結むすむとせり  
 今中いまちゆうでハ款おかし乃ぬくさせくゆ一物もの被ひきこし

うりしはひのくおととちりていさく物とゆらぬま  
 一乃法よのりか親おや乃のひ一月見もあがとゆゆら  
 ちよあころとてたちて屋らり行ゆく金かねをひ行ゆ  
 ぶ人ありと思さくちありといふ合あ合あ事ことはゆとあり  
 さるああるらんそ女をわきもみに引ひくゆきて人よ  
 る志こころせとくちらぬぬかむれとゆは不ふゆる志こころ  
 十人じゅうにんあをいあまが中ちゆうにのさまふ金かねああるぞおま  
 ちうはゆらあせとてつらぬ行ゆくと却かへてくおくとあり  
 こ乃女このにょれお屋おや乃ぬく乃の白しろ上うへにゆまては女にょ乃ありぬ  
 城しろうんかへくるにいま十年ありてまうくあんとは  
 うれ月つき日ひ易やすれ台たいする男おとこきて屋やらんぬるあとかん

てがふふ金あると信じて、  
 ひうひんといふまづくわん海にけつち地あては  
 どのちんと思ふとあるのちへ北をる海にこの家  
 城をうりてむをだしてむふ城まら法をてむら  
 人をかくせめをれむあまをこあまの占する物を  
 あ海ををるてうらむのいして城へいそいふ  
 きあちりちりあまのトのけいも集を堂に  
 よきとて志る事にてありける也

九  
 此の事いふはむりし陽院造らあ間治  
 此の事いふはむりし陽院造らあ間治  
 此の事いふはむりし陽院造らあ間治  
 此の事いふはむりし陽院造らあ間治

はつらに海にいまむまのさるは女房乃房  
 よ女よ抱つてて中ていそく別乃あにあはまとい目  
 事とてまつるにうてかくおそくまはる僧  
 さつ事とてまつるにうてかくおそくまはる僧  
 らいさあ入るるををりぬとこそ中をれ則よく  
 あし世行よなり心答僧といふありぬ事  
 事はむりし治つて通後卿後捨送ををるる事  
 事とてまつるにうてかくおそくまはる僧  
 思ふうむらひるるに治つておそく抱るる事

ふらうむらひかよかん  
 きんをすは三條院くまをせ行て乃ち園家あり

さうりよそゆーにむ乃乃をひそむゆにはむわらば  
ゆーばつらうさ流りてゆーなるまそ

あまみーにまをむらぶにされりきり

むーそをも乃をむらぶにさりきり

とそはつてゆーかといひきき通俊マム

ふらんそりゆーむらぶにされりゆーゆーゆーゆー

ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

撰集うをそゆらるそむそあそすあそあそゆきあそ  
ゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆーゆー

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

あそゆきあそゆきあそゆきあそゆき

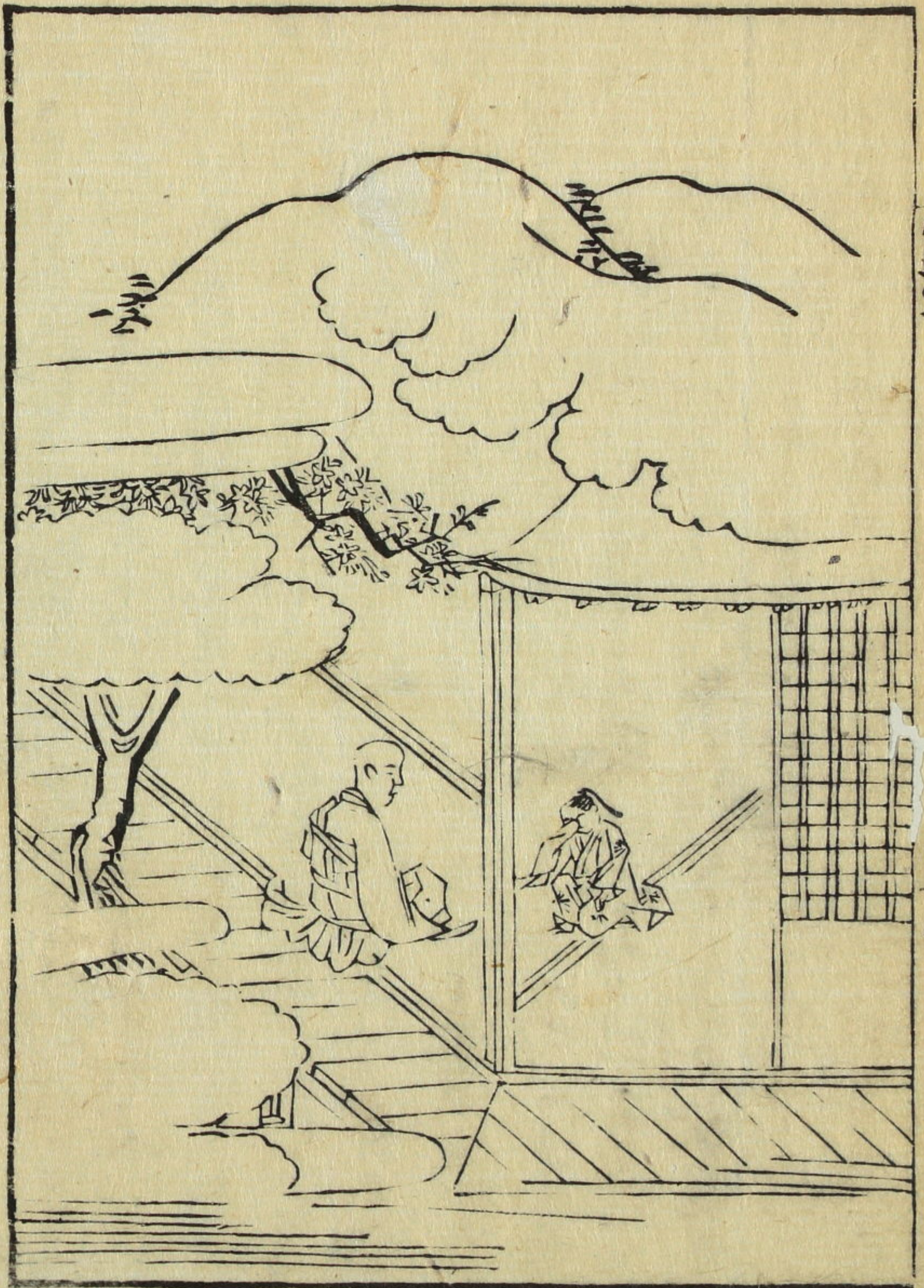
しそおろくくヤて出ぬ事とかりあまは流アツら  
うぬづもそてあまをりくもれあつひうとぞぞ  
身いけあ

あまは志今いひしう 京極乃源大納言雅後といふ人  
かろまると伝事をもり礼をたに伝事ありて僧も持  
然うせまゝ一生不犯あるもまゝいひく書を行を  
まげ家にある僧乃礼盤にいほりてまゝあつた  
しきせかひいふあつたにぬく持本をもりてあり  
まゝうてうちまやぞまゝうてあつたありなれど  
大納言いひにといふまゝにけり候どにいひさし物  
といふまゝあつたまゝにだくとおまゝに流ひく思もろ

母といひ乃僧乃解つれなるあつてかゝるあつて  
ひききつひにまゝに諸人おろしひきかゝりてまゝ  
ひきなるに一人乃侍ありてうまづるえいひく流を  
まゝあつたまゝうと向もるに乃僧乃いひしし佛り  
てまゝおろしまゝうてまゝあつたまゝいひよまゝうて  
あつりそれまゝにいひなるまゝのまゝにまゝうて

あまはも今いひしう。法敷乃いひまゝありまゝ僧  
まゝらまゝいひし流をりひひさしひきかゝりといひ  
まゝのまゝいひし流をりひひさしひきかゝりといひ  
いひまゝに流をりひひさしひきかゝりといひ  
まゝのまゝいひし流をりひひさしひきかゝりといひ  
いひまゝに流をりひひさしひきかゝりといひ





此道も今えびりし源大納言定房とつれを  
 乃符よ小菰若とら小符ありとせり屋かて女にあ  
 いかしてぞあつとせふ。びと先をぬきては  
 とも道をりと乃小菰若の教乃沙汰とてそれと  
 ともり定を焼りよ若若らとてさうけをせれ女乃  
 めるたひさつとやうきりし乃ゆめをるあつけり  
 よれよ志乃れさく房へ入よ志あもあうきりあり  
 ありてあうりて房よ志のびさくあうきりあり  
 こ乃あれぬらうつこのかりにせりしけりし若若  
 ありて袖よりきりし志あつてあうきりあり  
 色きくゆきりけあよ志の志りし若若若若乃若

信書くつておとせしむるはこれぞよしとてこれぞよしとて  
 まつたふに授け酒を入るるらんらんらんらんらんらんらん  
 舞うとあそぶかたのうたをうたうたうたうたうたうたうた  
 とりしにわがまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
 そりまのうたの女房のうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 れるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 あまのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 とはなれぬかたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 きつていしていしていしていしていしていしていしていして  
 小春ちたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 うらららららららららららららららららららららららららら

さをきておとせしむるはこれぞよしとてこれぞよしとて  
 あらう打ておとせしむるはこれぞよしとてこれぞよしとて  
 あまのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 ともく大鼓のうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 あまのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 大童子れまらん志方れれ物しらうららららららららららら  
 もみぬぐごる舞のうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 うらららららららららららららららららららららららららら  
 うらららららららららららららららららららららららららら  
 まりまのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうたのうた  
 りらららららららららららららららららららららららららら

らびをきかして引どめんといふ處よりせんやう  
しつとてころ鱧をぬきしづらひも運ば大童子と  
ふらふといふやうに世にわたつた人の形をたふ  
うさつてこれらふらふやうにあらはれりといふく  
先くはごいのなりなるもの市況ありしゆに  
もぬいぞかんあるありしは海にいたる鱧乃ら  
やうまをくくせん志をうきまて名とよ海よ  
川とくは大童子かまひいぬ一とぬきつとま  
時よころ鱧よしつせなる男をんする所  
ありとあはれをんころ大童子のいふ海へ  
ぬいよけむといふ男といふやうにぬきて

かぬはげてくはん行人とひかきよくとるに  
ころかろ大童子に流すつとせんとせん志也  
物ぬき流すといふいふかぬ海ありとやいふ  
ふべきやうにわたりとて男をぬきせぬや  
くまんと引あきをせりといふはかぬ海あり  
よろくくさきとて男をいひとくはんと  
と見よころ大童子のうらまへあれ如新ち  
りぬきつたやうにわたりとてあきとんい  
ふ女流ありともいふはかぬ海ありとて  
いありやんぬといふはかぬ海ありとて  
あるとていふとていふとていふとて



今六じつ。舟後<sup>ふねのち</sup>より老<sup>おきな</sup>屋<sup>や</sup>ありき。地<sup>ち</sup>蔵<sup>ざう</sup>井<sup>い</sup>。  
 えあうつきぶくはあつと地<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 きつて曉<sup>あけ</sup>おとよ地<sup>ち</sup>蔵<sup>ざう</sup>見<sup>み</sup>きつてまつとんとてひとよ  
 のまごのあつとくに情<sup>じやう</sup>打<sup>うち</sup>乃<sup>の</sup>ちちちまておる  
 かんく危<sup>あやう</sup>ふいさしきよ何<sup>なに</sup>じさう<sup>さう</sup>結<sup>むす</sup>ぶとつて  
 地<sup>ち</sup>蔵<sup>ざう</sup>井<sup>い</sup>のあつと地<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 さうせんとしてかくあつとくはりとしてだぢさう  
 乃<sup>の</sup>あつと地<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 行人<sup>ぎやうじん</sup>あつとせんとしてあつとくはりとして  
 こつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして  
 こつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして

屋<sup>や</sup>そつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして  
 行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 見<sup>み</sup>きつてまつとんとてひとよ  
 とつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして  
 まつとんとてひとよ  
 乃<sup>の</sup>あつと地<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 さうせんとしてかくあつとくはりとしてだぢさう  
 乃<sup>の</sup>あつと地<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>ふととをわのわん。  
 行人<sup>ぎやうじん</sup>あつとせんとしてあつとくはりとして  
 こつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして  
 こつとくあつとくはりとしてあつとくはりとして

とりぞおまゑん子海にぞの志もあはれ  
 望くおつめりてはらへはるきそらるる音も  
 へはもちてあつめりてはるきそらるる音も  
 こそ無してはるきそらるる音も  
 よりや乃らんまゝあはれはるきそらるる音も  
 もいそと先ぞききちりまゝあはれはるきそらるる音も  
 まねぐそ入るちりまゝあはれはるきそらるる音も  
 へはもちてあつめりてはるきそらるる音も  
 おくらそはるきそらるる音も  
 くはるきそらるる音も  
 へはもちてあつめりてはるきそらるる音も



寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の  
 寺乃事り事あるに自ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>てん<sup>ん</sup>せんと事<sup>り</sup>大<sup>大</sup>佛<sup>り</sup>の

解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も  
 解<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>り</sup>た<sup>も</sup>事<sup>も</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>物<sup>り</sup>も

宗合

二五五

守海  
つももあまれをいふ海といふもなる智にまれ  
ゆきまれのつももなる人ともなる人あまをいふ  
来平よりつももなる事しつていふくもなる事しつて  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる

守海

三十四

くどもにいふあまをいふ事しつていふくもなる事しつて  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる  
つももなる事しつていふくもなる事しつていふくもなる

守海

三十五

米として任仕しきる格勅乃そのそし乃食米あり  
る此所より以よかりてきりしきる者此中へは  
<sup>そら</sup>無きも又位ありきりし此か後一某乃産して萃  
<sup>彌</sup>彌きりて古うち増しておされいそい色彌よあ  
かんとりし者いど一仁乃産して一志史殿のまゝい  
色か後よありせ新まじやそ補お位まゝいあきゆ  
きとりのもあをせきしてまうりそんりといをか  
ゆんとして産ぬまて官又自らるりありてきりし  
きりしてあつしきる者利仁きていふ産りいそい  
<sup>行</sup>行の湯あまにたま殿といむどわこ此事いれ  
<sup>所</sup>所いゆゆゆゆに業地すそいゆゆ福といゆゆに

あな一乃きりてゆりといむおれりましくとい  
えらにきりてきりて二年のあつたのいぬきり  
<sup>産</sup>産きりていにおろしきりていぬきりていぬきり  
<sup>に</sup>にきりてきりていぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>元</sup>元乃あつたおれりといぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>先</sup>先りといぬきりていぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>事</sup>事しきりていぬきりていぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>と</sup>とゆりといぬきりていぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>あ</sup>あし利仁といぬきりていぬきりていぬきりていぬきり  
<sup>と</sup>とそありけあ河原うらむいぬきりていぬきりていぬきり

おのほよの流りこころをいかにかゝりてそは  
色を好むはことごとく山を風も吹く  
えともくまありて一山をめぐりて  
井もけしきありける僧乃もていかに湯  
こころをたのむもよもたくるれ  
とゆふことおもも湯ありてまも  
いとほきありけるかたもたつて  
おろすれしうおころもあま京  
いかに下人風をもくもへりて  
あまのくまありて一山をめぐりて  
とつておのほよの流りこころをいかに

を風づのしほりてまのあらはて  
よまう称乃一しりおのほよの  
そ利仁狐も一しりおのほよの  
まどをまのせはらしてまのあらは  
狐乃鹿足城をく引あまのあらは  
まのあらはてまのせはらしてまの  
いかにまのせはらしてまのあらは  
まのあらはてまのせはらしてまの  
まのあらはてまのせはらしてまの  
まのあらはてまのせはらしてまの  
まのあらはてまのせはらしてまの  
まのあらはてまのせはらしてまの

利仁狐  
一しり  
おのほよの  
流りこころ







まゝとせよふいぢとてはたはたそぢとてはたはたそぢとては  
いそぢとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
乃とてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
行物とてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
かえんとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
きてつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
いそぢとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
つとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
物つとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
つとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
とてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
とてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた

あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
そのの行つとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
よとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた  
あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた

あつとてはたはたそぢとてはたはたそぢとてはたはた

て此れにうたふよゆせきうのつゆやとに抽き  
かふよとくは海軍かうとをさしたるのころき  
まぬ海軍よとふんれ下人をきまえたれおま  
らの何よ何よこすふらふ又かんのいもかのく一とら  
つとらふまをたつふらふあるとおの海軍はあれた  
もふまのふと地くて移つぬあつらき方にけ  
むをよ越しく城よのすつ城をたはまふ  
あんとまこにさやまうんまをさへて  
ちよおま海軍に幕あをまおれたれなむ  
あをさふぬまをさるまをさるたりあんとみる  
何とにけし男の本乃海軍はあつらふ

て戦て一まら海軍してぬれらう地つ  
けをく城をれは海軍の口三すもろもろあ  
むらあるまをさるつとてまをさる海軍  
何まをさる海軍はあつらふ  
夜アを海軍はあつらふ  
物も海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ  
かまをさる海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ  
あつらふ海軍はあつらふ

きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
紀女ごものきぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ

きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ  
きぬたあそびの物きり節志ていふやうにききげぬ



